

# 教kyo文bun研kenだより

## CONTENTS



50年前の専任カウンセラーとして  
～不登校の子どもたちと関わって、伝えたいこと～

永田 實 (県教文研元教育相談員)

「『ゆとり教育』は成果が出てきた！」

寺脇 研さん (京都造形芸術大学教授) の問題提起から



**50年前の専任カウンセラー教諭として**  
～不登校の子どもたちとの  
関わりを振り返って、  
伝えたいこと～

**永田 實**

プロフィール

(1992年～2002年県教文研教育相談員)

元横浜市立中学校教諭。1931年(昭和6年)生まれ。東京出身。慶応義塾大学文学部と経済学部を卒業し、横浜市立中学校の教員となる。1966年から、10人の先達と共にカウンセラー専任の教諭となり、学校を巡回し、その後、全国で初めての取り組みとして、不登校の子どもたちの学級の担任となった。サポート校の代々木高等学院の校長も勤め、その間に国大非常勤講師、ラジオ、TV出演や各地講演会などで、不登校の子どもたちの問題に発言を続けている。

### 1 私自身も登校拒否児であったことも含めて考えること

私は幼児期からかなり重い喘息児でした。戸外で遊ぶ体験は皆無に近かったほどです。友だちもいません

でした。親は「この子は学校に行けるだろうか」と案じていたといえます。それだけに、入学式の光景は不思議に記憶にあります。薄暗い空間の奥に、今で言えばテレビ画面のように見える所に何人かの人がいるような場面、それは不思議な異界の記憶でした。校舎や校門などの記憶は全くありません。1年生の出席は3分の1以下でした。ただ、次の唱歌は妙なことに覚えています。

“わたしは ことし みなさまと  
はじめて がっこにいきました  
せんせの おしえを よくまもり  
びょうきの ほかは やすますに”

2年生になると、担任が替わりました。ある日その先生が話したこのことは覚えています。

「この組にはいないけど、上級生になると病気になるのに休む子がいる」

「この組にはいないけど・・・」と聞くと少し安心しましたが、自分のことを含んでいるような気がして、妙にこの言葉は覚えています。

友だちはできませんでしたが、1年生のある時に「あ

そば！」と声をかけてくれた子がいました。うれしくて家にも連れて来て遊びました。その子を見て、母親が複雑な顔をした記憶があります。ただ、3年生の頃に下校の途中で、その子が道路の土をなめたのを見て、「この子は？」と思った印象があります。私の中に差別的な見方が生まれていました。その後、転校したのか、消息は知りません。

3年生の頃か、喘息の症状が治っても1週間以上登校しないことが、しばしばありました。ある日下校時間に、玄関の外から数人の声で、「ナガタくん！」と呼びかけられることがありました。それからしばらくしてのこと、朝、両親が私に突然ランドセルを背負わせて、力づくで玄関に引き立てて行きました。その時私は、必死で柱にしがみつきの、大声で泣きわめきました。

5年生の時、転校してきた子が私と席を並べました。私も一対一なら会話ができて、互いに話をするようになりました。ある日、何のことも覚えていませんが、教室で彼と言い合いになり、そこに担任が入ってきて、私が涙を流しているのを見て

「お前も喧嘩するようになったか。」と言われたのも覚えています。

しかし、3者関係は苦手だったようです。中学高校時代は親友もできましたし、グループ関係も少しは良かったように思います。



## 2 全国初の教員カウンセラーになって

横浜市と神奈川県教委は連携して、1964年に画期的といえる、教員自身が授業や校務を免除された専任カウンセラー制度を発足させました。「戦後第二次非行期」の只中でした。非行児は学校での叱責、警察での取り調べ、児童相談所や少年院、家庭裁判所送致といったように、幾度も「指導」を受けていました。その前に、教員自身がカウンセラーとなって“子どもの言うことに耳を傾けて”、当人が自己決定できるための同伴者となっていく主旨の活動の始まりでした。併せて、学校、保護者、警察、児童相談所、家庭裁判所等との相談や協議をする役割も担います。横浜では初年は3名でしたが、年度毎に増員し、最終的には区毎に担当専任カウンセラーを置いて、市内全中学校を週1回は訪問するシステムになりました。委託生徒の面接をし、面接内容は学校にも秘匿することの承諾を得て、長欠の子の家庭訪問もしました。いわば、今日のスクールカウンセラーの先駆であったと言えます。しかし、その頃は、心理職を学校に派遣することには教員の抵抗感が強く、極めて困難なことでしたので、教員自身が担ったのです。これは横浜市では生徒指導専任教諭の原型ともなりました。子どもにとって

は、見も知らぬ人と会う、奇妙な体験の始まりだったことでしょうか、学校の教員からは「えっ、あの子が口をきいたの！」と驚かれたこともありました。

長欠の生徒について、当時英米では、従来の怠学とは別の school phobia とか school refusal などと言われ、学校恐怖症や登校拒否と訳語がつけられていることを初めて知りました。我が国では当時休んでいる子どもに直接面接した専門家はほとんどいませんでした。しかし、畏友・精神科医故河合洋が執筆した「学校に背を向ける子ども (NHK ブックス)」がロングセラーとなり、この本の中では、「この状況は若者の異議申し立ての一端」としてとらえ、「学校拒否」の方が意味を含んでいると述べていますが、文部省が「不登校」という言い方を始めたので焦点がぼけてしまったと思います。

その後、私が「専任カウンセラー」の仲間とともに出会った何人も不登校中学生のための一室が、横浜市青少年相談センターの中に開かれ、市内の「登校拒否」中学生を対象とした教室が1971年に特設され、私もそれを担当するようになりました。その後、教室を近くの富士見中学校内に別棟として移転し、やがて市内8校に相談指導学級が設置されたのです。8校のうちの2校は小学校です。

その頃までの状況では、「登校拒否は思春期に直面する課題」だと私はとらえていました。この辺りの認識は、自分自身の体験と照合する意識が乏しかったと思います。登校拒否とはどういうことかについての真剣な洞察に欠けていたのではないかと思います。

それには当時の、またその後も識者たちの見識に納得できないことが多かったと感じていたからでもあります。それは、本人、家族、学校、社会を含んだ有機的総合的見識が示されていないことも絡んでいます。「いじめ」問題も同様に思われます。

## 3 不登校生徒との出会い

学校に行こうと、前の晩は支度をしても、朝になると起きられない、起こしてもお腹が痛いとか頭が痛いとか訴える子どもも多くて、それが昼を過ぎるとそういった症状がとれてしまう。アメリカでは最初の頃、「学校恐怖症」という呼び方で、学校に行こうとすると身がすくんで震えてきてしまう。恐怖症の一つみたいな捉え方でした。

だから学校の先生が行ったのでは、まず会うことができない。私も家の人の了解を得て行きますが、その時には、お母さんには「ひょろっと来ますから」と打ち合わせをして。ひょこっと会うことができて、「なぜ学校に来ないのか？ どうしたんだ？ 理由は何か？」ということは一切しません。

それで、一緒に黙ってテレビを観たり、横に座りこんで、子どもも観ているうちに面白いことがあると笑ったりし、こちらも一緒に笑ったりしました。だから親からは「せっかく来てくれて学校に行くようにしてくれるのかと思ったら、なによ、一緒にテレビ観て呑気にして、帰って行っちゃう。」と思われていました。

子どもはどういう気持ちでいるかといえば、「自分が学校に行っていないからこうやっておじさんが家に来るんだ。」と、思っています。

ある男の子は、行けば会って、庭を見ながら「トウモロコシを植えたらこうなった」とか少し話して、週に1回で計10回目の時に、ちょっと感じが違うなと思ったら、少し居ずまいを直してから、「先生毎週来てくれるけど、いつまで来るの?」と訊かれたので、「ずっとこれからも来るつもりでいるよ。」と言ったら、かなり真面目な顔になって、「今まで先生のこと、試してたんだ。こうやっていれば、いつか来なくなると思ってた。だけど、これからもぼくと付き合ってくれるのなら、今日から自分の本当のことを話します。」と言ったんです。だからといって、こうだから学校に行けないとかではなく、自分の気持ちをぼちぼちと、「夜眠れない」とか「つらいんだ」とかを話してくれるようになりました。

私は試されてた、テストされてた、ということです。不登校の子に限らず、子どもが教師に会った時に、子どもの方も教師をテストしている。教師は授業の結果をテストするけれども、子どもの方も、この教師はどんなふうに思ったり、どういうふうな考えでいたりするのかということテストしている。特に学校を休むようになる子については、感覚が鋭いというか、初対面の瞬間で「嫌」とか「ダメ」とか「まあいいか」とか、会った瞬間から思うみたいです。学校の先生の訪問は、電話の音でも気配で分かっちゃうという子もいました。

だから、子どもも不安ですけれども私も不安で、ある女の子の家に事前に約束して何うと、お母さんは台所に行ってお茶の用意を始めてしまう。その時、子どもとは初対面です。私もドキドキして、何と言おうかと思った時に、お母さんの後ろ姿を見ながら、「お母さんて、お見合い結婚なの?恋愛結婚なの?」って、つい聞いてしまったんです。ひょっとイメージとしてお見合いが浮かんで、それをぼっと口にしたら、その子がクスクスと笑って、「お見合いみたい」って言ったんですね。そうしたらお母さんがお茶を出しに来たから、「お母さん、お見合いですってね」と言ったら、「ええ?この子がもうそんなことを言いましたか?」って驚いてました。言い方は突拍子もない言い方でしたけれども、会う時には対等ということが大切です。上から「何してるんだ?」「どうして来ないんだ?」と、言葉に出さなくても雰囲気として感じたら、子どもは何にもしゃべれないですね。



#### 4 通信制サポート校での体験

退職後、県教文研の電話相談スタッフの一員もしていました。そのうち、行き場のない不登校生の受け皿として発足した、通信制を活用して高校卒業も達成できる代々木高等学院の校長を引き受けることになりました。入学はテストではなく面接で本人の思いや希望を聞いて決めました。入学して来る生徒たちのほとんどが、中学時代は長く学校に行かなかった生徒たちでした。東京以外から遠距離通学する者も多いし、委託寮に入寮する者もいます。それらの多くが、人が変わったように明るく振舞うようになります。マスクミがサポート校との呼び方をするようになりましたが、私たちは従来と違うオルタナティブな新しい学校との意識で、ビルの一角の教室で生徒への授業や諸活動を展開していきました。保護者たちは子どもたちの変わり方に、目を見張っていました。

一般の高校での不登校はほとんどが退学して追跡されていませんでした。代々木高等学院では中退者や転校生もこだわりなく受け入れていきました。卒業式には壇上から一言を発していくしきたりになっていきましたが、ユニークなスピーチの中でみんなが「Y高等学院に来てよかった。スタッフにも親にも感謝」との言葉を残していき、大きい拍手が起こります。在学中に警察や家庭裁判所、場合によっては鑑別所、少年院にも世話になる者もいます。そこには、担任や私も、一度ならず面会に行きます。退出すれば復学します。同級生は何も知りません。長くクラスに顔を見せないことは、不登校体験者にとっては不思議なことではないから、誰も聞かないでいます。相談員は入学の時から自然に会話をしていくので、いつでもどこでも話ができるし、個室でじっくり話もできます。感覚のいい相談員がいますので、相談は日常の風景です。

こういうことを、現実の高校や中学、また小学校でやるわけにはいかない実情は、私も十分承知しています。ただ、私の知る寄宿制私立高では、関東でも関西でも、同じような光景を見えています。それには、文部科学省も認めている、スクールソーシャルワーカー等の新しいシステムが必要だと思えます。

#### 5 結語

中勘助の「銀の匙」の中で、ある時から学校に行かなくなったと書かれていたことが記憶に残っています。また、元日本野鳥の会会長が、「祖母が栄養を心配して砂糖水を毎日吞まされたら、学校に行けなくなってしまったが、それをやめたら登校するようになった」と新聞に書かれた文を読んだ記憶もあります。私自身の不登校も、今になってもわかりません。それでも今は多くの不登校生が累積し、年齢も広範囲になっている状況があります。その人たちが何かの機会に someone との出会いで社会生活を送っていると見聞もしますし、不登校については、行政が検討する「対策」ではない something が広く必要だと思えます。それには全国各地で NGO、NPO で取り組まれている活動が生かされる必要があると思えます。



## 「『ゆとり教育』は 成果が出てきた！」 寺脇 研

5月10日寺脇 研さんから問題提起いただきました。

2002年から〈学校5日制、総合的学習の時間、到達度評価、学校評価〉など大きな教育改革が実施されました。それからの12年、そして今後の10年をどう展望していけばいいのかについて、当時、文科省に在任して学校5日制、総合的学習の時間などを積極的に導入し、いわゆる「ゆとり教育」の推進者として自他共に認める寺脇研さんに「ゆとり教育」について問題提起してもらいました。

以下は県教文研でその内容をまとめたものです。

### ・「ゆとり教育」をどう考えていますか？

導入当時は議論があったが、10年たったいま、PISA調査の結果でも分かるように、明らかに効果が出てきている。OECDもこの10年間の日本の教育はすばらしかったと絶賛している。政治家とマスコミが誤って伝えている。

### ・「ゆとり教育」はそもそもどういう考え方だったんですか？

生涯学習という考え方に基づいた教育改革と考えている。1970年代「成長の限界」という考え方が出て、経済成長が限界に達したとき、何に価値を置くのかと考えた。価値を生産性とか富とかではなく、どうやったらみんなで共存できるのか、競争から共生へと変えていくことが必要だと考えた。

競争型学力から、共生型学力へ変えなければいけない。例えば、話し合いをする能力、互いの価値を認め合う能力がないと共生できない。そういう力を試したのが、PISA調査です。当然2000年のPISA調査の結果が悪いわけです。

### ・PISA調査の結果をどうみますか？



PISA調査は15歳（高校1年）が受けている。つまり小中9年間の学習成果を見ている。2002年からゆとり教育を受けた子達が受けて、15歳になり、順位も上がり、OECDからPISA学力の優等生と言われた。

これに対して、文科省は「脱ゆとり教育の結果、順位が上がった」と発表した。しかし、池上彰（12月20日朝日新聞）や藤原和博（1月29日毎日新聞）でさえ、とんでもないことだと言っています。

### ・「勉強」と「学習」の違い

私は大学に行くことが大切、いつでもいいから大学に行きなさいと言っています。中学生に「勉強が嫌いな人」と聞くと全員が手をあげますが、学ぶことが嫌いな人はいない。つまり、大学では「勉強」はない、全て「学び」なのです。だからその場に行くために小中高があるんだと話します。「総合的学習の時間」はまさに学びの場です。日本では特に小学校ではきちんとそれをやってきた。その結果がPISA調査に表れたと自信を持って下さい。

### ・小中が変われば大学が変わる。



以前は大学入試を変えなければ、小中高の教育は変わらないと言う議論があった。東大がAO入試を導入しようとしているなど、今大学入試が変わろうとしているけれど、それは小中学校が総合学習やったからなんです。自分の学びたいことが学べる大学に行きたい、ということです。大学が変われば、進学校も変わらざるを得ない。昔ながらの受験勉強一本槍の進学校は変わらざるを得ないと考えています。

### ・最後に

小中学校の先生方がこの10年間やってきたことは間違っていない。「学びの楽しさを身につけさせた。」と積極的にアピールして行って下さい。そうしないと、これだけの業績を上げているのに何の評価もされず、180度違う政府発表やそれを垂れ流すマスコミによって、教育改革は潰されてしまう。

（神奈川県教育文化研究所編集）